



江井秀雄著『自由民権に輝いた青春一卓三郎・自由を求めてのたたかい』

大畑, 正弘

(Citation)

日本史研究, 489:92-93

(Issue Date)

2003-05

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100495608>



江井秀雄著

『自由民権に輝いた青春』

—卓三郎・自由を求めての

たたかい—

大畑正弘

本書は、民権派私擬憲法の一つとして名高い「五日日市憲法草案」(一八八一年中頃完成)の起草者千葉卓三郎(一八五二、六、一七〜八三、一一、一二)の苦悩と情熱に満ちた生涯を、あふれんばかりの愛情と執念で描きあげた好著であり、その主な構成は以下の通りとなっている。

《序文》 世紀を越えた二人の青春に感動する
色川大吉

序章 謎の人物を追って

第一章 タイムカプセルから飛び出した青年—うずもれた逸材千葉卓三郎—

第二章 子孫を追っての旅—仙台から神戸へ—

第三章 嵐の時代に—変革に翻弄される若者—

第四章 真理を求めて—放浪する若者—

第五章 日本で初めての民主運動

第六章 三多摩に燃え上がる炎

第七章 憲法起草で日本中が燃えた

第八章 半世空過 旅窓夢—卓三郎、その早すぎる死—

終章 卓三郎の残したもの—憲法の問題と戦後日本への地下水—

《跋文》 五日日市憲法草案の起草者卓三郎発掘のかげに 下山三郎

あとがき／参考文献／千葉卓三郎関係年表

著者は、一九六八年八月二七日、当時、色川ゼミナールの副手として、東京都西多摩郡五日市町深沢(現在のあきる野市)の朽ち果てかけた土蔵の中から「卓三郎を発見し追跡して現代に蘇生させたひとり」であり、生誕一五〇年を前にして、「志半ばの三一歳という若さで人生を終焉させた『タクロン・チーバー氏』の声が聞こえたような気がした」(二四頁)という江井秀雄氏。

ドキュメンタリータッチの評伝として、深沢家文書の発見から、対象への猛追、史料公開に至るプロセスなどを中心に、卓三郎の生涯に強く迫るものとなっており、我々は本書

を通じて、現時点における千葉卓三郎研究の到達点を確認することができると共に、自由を求めて必死に闘い続ける卓三郎の姿や、彼の足跡を一途に追い求める江井氏らのひたむきな探求姿勢を通して、困難な状況下でも懸命に努力し続けることの大切さや、勉強することの本当の意味での素晴らしさといった事柄についても再認識をすることができるのである。

また、本書は、良い意味でのアマチュアリズムに支えられた戦後歴史学の青春のいぶきに満ちている。マルクス主義の権威失墜や性急な政治主義への批判といった文脈の中で、近年ともすれば否定的に語られることの多い戦後歴史学の歩みであるが、そしてそれは歴史学の「学」としての成熟という観点からすればもつともなことも多いのではあるが、だからといってその頃の歴史学が持っていたあの種の「熱さ」や「健全さ」、そしてまた初学者に対する親切さといった良い点が忘れ去られていいとは思えない。そういった意味で本書は、現在の歴史学のあり方に対する骨太な問題提起の書であるともいい得る訳である。

一人でも多くの人々が本書を実際に手に取られて、江井氏のメッセージと真摯に向かい合われることを心より祈念する次第である。

(二〇〇二年三月刊、草の根出版会)

一三九頁、二四〇〇円)